

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」^{ほうそうげんこう}放送原稿（1月24日（金）放送分）

FMラジオ ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。^{か ごしまけんりつあまみ と}鹿児島県立奄美図書館^{しよかん}です。

今朝は、「図書館アラカルト」と題して、昨年末に奄美図書館で行われた「奄美群島日本復帰60周年記念シンポジウム」についてお話しします。

奄美図書館では、ここ古田町に新築移転した平成21年から、毎年、復帰記念日の12月25日、またはその前後の日に、「奄美群島日本復帰記念講演会」を開催しています。本年度はちょうど復帰60周年に当たるということで、各地で様々な記念事業を行った青年の皆さんに集まっていただき、パネルディスカッションと助言者の講話によるシンポジウムを開催しました。日本復帰を単に祝賀するもの、懐かしいものとしてとらえるのではなく、今後の奄美群島の活性化につなげていくものとしてとらえていこうという意味で、テーマを「復帰の力を未来へ」とし、活動を通して学んだこと、復帰運動の意義を今後にどのように生かしていくのかということをも5人のパネラーに発表していただきました。その概略を紹介しましょう。

一番目は、公民館の生涯学習講座の運営をしている「NPO法人アマミーナ」理事長の^{かみほりうち}上堀内ちあきさんが、日本復帰をテーマに川柳を募集し、句集『奄美・ワールド川柳』を作成したという取組を発表しました。座談会を開いて復帰運動を学びつつ、日本復帰を世界に発信する、若い人たちに関心をもってもらい、公民館講座の文芸という特長を生かすという方針で句の募集をしたところ、全国から予想を超える647句が集まったそうです。それをもとに審査会、朗読会、句集作成と充実した活動^{がゆ}ができたということです。「タンスにて 寝てた日の丸 空に舞う」、「食糧難 ナリ粥すすり メタボなし」、思わず微笑んでしまいます。上堀内さんは、「奄美の復帰運動が武器を使わぬ民族運動であったこと、奄美は心癒やされる場所であることを、日本全国、世界に発信していきたい。復帰運動を知っている世代と知らない世代をつなぐ役割をしたい。」と抱負を述べました。

二番目は、若い経営者の集まりである社団法人奄美大島青年会議所会員の^{みなみ}南^{こと}琴野さんが、「伝える・つながる・日本復帰60」というイベントを開催する中で、復帰運動の歴史と意義を若い世代に伝えていかなければならないという思いを強く持ったという発表でした。今後復帰運動に携わった方々が高齢になり、話を聞く機会が減っていきます。よって60歳以下の若い世代が、歴史を知り後世に伝えていく必要があるわけです。名瀬市以外の町村ではどのような運動が行われたか、関東・関西の奄美出身者がどのような支援をしたかも知っておく必要があります。そのためには、家庭・地域・学校・県外で高齢者からお話を聞く機会を持ち、南さん考案の「聞き取りシート」を使ってまとめてほしい、自然遺産とともに復帰運動が世界文化遺産としての価値を認められ、島外から訪れた人に、奄美に住むほとんどの人が復帰運動の話ができるようになってほしいという夢を語っていました。

三番目は、奄美群島青年団連絡協議会会長 保池 穂好 さんが、昨年10月20日に住用の奄美パークで行われた音楽祭「夜ネヤ 島んちゅ リスペクチュ」について発表しました。復帰運動の思いを密航陳情団の一人 師玉 賢二さんに学んだこと、共催の奄美FMディさんと打ち合わせを何度も何度も行ったこと、青年団協議会の仲間が、群島12市町村の青年団を巡って復帰60周年や音楽祭への熱い思いを語り、了承を得たこと、その各島青年団が独自の余興で会場を盛り上げたことなど、舞台裏を明かしてくれました。当日は、島の内外から千人以上の観客が集まり、テレビニュースで取り上げられるほどの大成功を収めました。保池さんは、師玉さんから復帰運動で出会った人々の親切、日本分離をもたらした戦争の悲惨さを学んだそうです。そしてこの反戦平和の精神により日本を助けられるような奄美にしていきたいという思いを話していただきました。

四番目は、沖縄からカヌーに乗って奄美群島を縦断した「結人プロジェクト・チャレンジ」白畑 瞬 さんのお話でした。白畑さんは、本や体験者の話で復帰運動の歴史や密航の様子を学んだ後、当時と変わらない小舟の同じ目線で、同じ波にもまれながら、体全体で復帰当時の人々の苦難を感じたいと思って出発したそうです。兄弟島の人々と復帰の思いをつなげるという信念のもと、各島々で復帰までの8年間の苦難の道のりを子どもたちに伝え、古老の話を青年団の人たちとともに聞いたとのことでした。台風や梅雨時期の大雨の中、300kmの行程を航海できたのも、当時の人たちが命がけで日本復帰を成し遂げたシマンチュ魂、スットゴレ精神、負けん気を学んだからだとも話していました。今後は次の世代に語り継ぐこと、鹿児島までカヌーで密航のルートをたどることが目標だと目を輝かせていました。

最後は、大和中学校の 野口 淑子 先生です。先生は子どものころ、島を誇る教育を受けてこなかったことを教訓に、子どもたちに奄美のすばらしさを伝える郷土学習をずっとされているそうです。その一環として一昨年、昨年と生徒たちと復帰運動に関する演劇を作りました。復帰運動はリーダーだけが焦点化されているが、一般の島の人々の暮らしの中にもそれぞれの運動があったのではないかという思いのもと、署名運動や不当逮捕された人々、とりしまった警察官を題材に物語が展開されます。「当時は小中学生・高校生が熱いエネルギーをもって運動に取り組んだ。その子どもたちのエネルギーを未来に向かって引き出したい。そのためには、教職員も復帰運動の精神を知って、感じて、伝えていくことが大切だ。」と述べておられました。

このように、復帰運動を後世に伝えたいと考えている青年がしっかりいらっしゃることを心強く思いました。奄美図書館も、今後、復帰運動の歴史を風化させることなく、その意義を将来へと継承し、さらに奄美群島の発展につなげていくお手伝いをしていきます。そのためにも、成人の方ばかりでなく、小中学生・高校生もこのような催しにぜひ参加して次世代の語り手、島おこしの担い手になっていただきたいと思います。まずは、南さんの提案のように身近なおじいさん、おばあさんや近所の年配の方々から復帰運動のお話を聞いてください。きっと勇気が沸き、未来への展望が開けてくることでしょう。

それではまた来週、県立奄美図書館でした。